

大平首相の決断

竹下 登

大平内閣で蔵相在任中の昭和五十四年二月十七日、わが家の末娘が嫁いだ。その結婚披露宴では、大平首相はじめ多くの方々から心暖まるスピーチをいただき、会場はまことになごやかな空気につつまれた。だが、この席上、大平首相と私の胸中は、ひそかな決意で少なからず緊張していた。なぜなら、その翌日に公定歩合の引き上げを控えていたからである。

戦後の金融政策の歴史を振り返ってみると、衆議院で予算審議中に公定歩合が引き上げられたことは一度もない。一月から三月にかけては、例年、経済活動が平穏なのでその必要がなかった、という理由だけではあるまい。公定歩合の引き上げは、国債金利その他各種金利の改定を通じて歳出増加要因となる。とすれば、野党は予算の修正を要求してくるかも知れない。これに応じては予算書の書き直しに時間がかかり、応じないとすれば論議が紛糾し、予算審議とその成立が遅れる。政府とりわけ財政当局としては、このような予算審議ひいては経済運営に及ぼす悪影響を懸念して、これまで衆議院で予算審議中の時期に公定歩合を引き上げること避けてきたのではあるまいか。しかし、わが国の経済規模が飛躍的に拡大し、世界経済との関わりが一段と深まるに従い、そうとばかりはいつてもおれない。予算の審議促進、早期成立を期することは当然である。が、だからといって、その緊要性に迫られているにもかかわらず経済政策の重要な手段である公定歩合を引き上げられないというのではおかしい。となると問題は、弾力的な金融政策発動の必要性についての認識を深める一方、金利改定

があつたからといって提出予算の修正を要することにはならない点についても、広く理解を求めることにある。

大平首相からその決心をひそかに打ち明けられた時、私は一瞬身の引き締まる思いがした。「竹下さん、公定歩合はこのまま放っておけませんね。いつの日かだれかがやらなければならぬことです」「総理は、この機会をあえて試験の場とお考えですね」「そうですね。二人でやりましょう」　　きわめて短い会話ではあつたが、大平首相の表情からは不動の信念が読みとれた。私はとつさに「なるほど、総理は財政当局の方は自分にまかせてくれ、野党の説得は君に頼む、と考えておられるのだな」と了解した。内外の経済金融情勢、とりわけ物価の状況は政策的対応の遅れを許さなかつた。私は、ただちに行動を開始し、国会審議のわずかな合間をやりくりして、財政当局として決断を準備する一方、野党委員への説得を精力的に続けた。しかし、あくまで表面は平靜を保ち、国会での答弁や記者会見では「公定歩合については、日本銀行の専管であり、答弁は差し控えさせていただきます」の一点張りで押し通した。その間、一方では娘の結婚式の準備もあわただしく進めなければならなかつた。二月十八日、ついに公定歩合の1%引き上げが決定した。同日午後、私は衆院予算委員会にあつて、委員長に対し特に発言を求め、日銀政策委員会が公定歩合引き上げの決定を行った旨の連絡が入つたことを報告した。混乱もなくタブーは破られたのである。

これが、いかに難事であつたかは前日銀総裁・森永貞一郎氏が、大平首相のご葬儀における弔辞のなかで、特に当時の「大平首相の決断」を賞賛し、敬意を込めて回想しておられたことによく表われている。

大平首相の突然のご逝去は、私にとって言語に絶する衝撃であり、深い悲しみであつた。その悲嘆のなかへネチア・サミットへ赴いた私たち日本代表団を支えてくれたものは、まさに大平首相の無言のご支援に他ならなかつた。ここに改めてご生前のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈りする。(衆議院議員・第二次大平内閣大蔵大臣)